

日本イギリス哲学会 第50回 関西部会例会

日 時： 2014年7月19日（土）13:00－17:00

場 所： 関西学院大学大阪梅田キャンパス アプローチタワー14階 1406号室

交通アクセスは裏面の図でご確認ください。

報 告 1： 13:05－14:15（討論を含む）

報 告 者： 西内 亮平（京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）

題 目： ヒュームにおける歴史的知識

報 告 2： 14:25－15:35（討論を含む）

報 告 者： 武井 敬亮（京都大学経済学研究科・経済資料センター・ジュニアリサーチャー）

題 目： ジョン・ロックのカトリック批判の再検討

－従順なカトリック教徒（English Catholics）の存在を念頭に－

報 告 3： 15:45－16:55（討論を含む）

報 告 者： 川名 雄一郎（京都大学白眉センター）

題 目： ドーバー海峡を渡ったトクヴィル

－19世紀イギリスの定期雑誌における『アメリカのデモクラシー』論

なお、各研究報告の要旨は、添付の別紙をご覧ください。

例会の後、簡単な懇親会を予定しております。こちらにもどうぞお気軽にご参加ください。

また、12月（予定）の部会報告をご希望の方は、以下の担当者あるいは事務局までお申し出ください。

関西部会担当

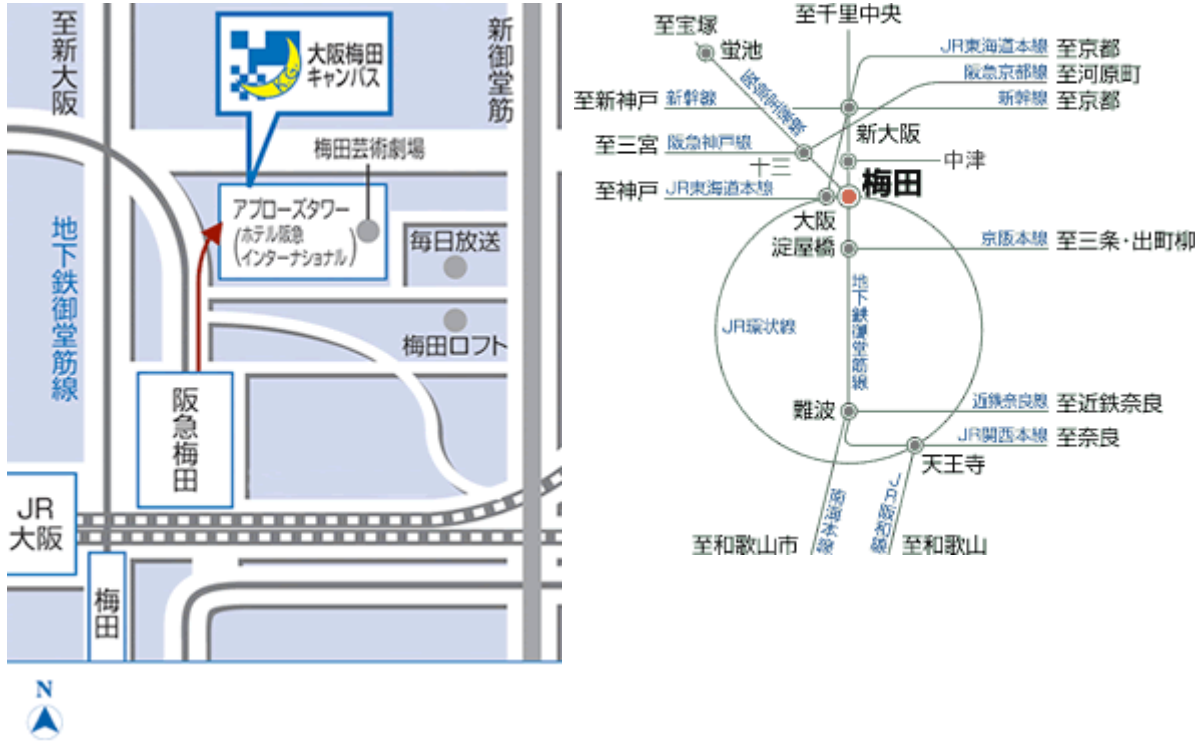
久米 暁（関西学院大学 exkume@kwansei.ac.jp）

竹澤 祐丈（京都大学 Takezawa@econ.kyoto-u.ac.jp）

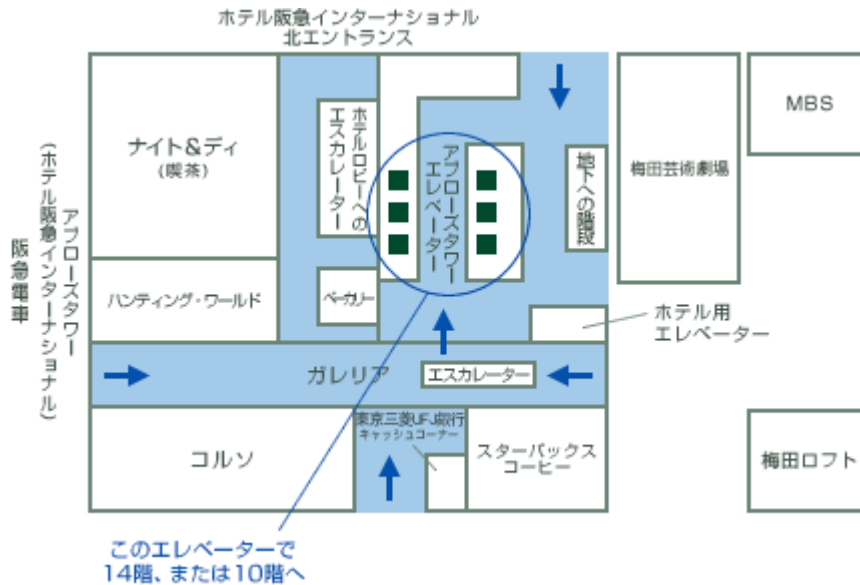
（◎を@に直して下さい。）

<会場案内>

関西学院大学大阪梅田キャンパス アプローチタワー（ホテル阪急インターナショナル）14階
 （阪急梅田駅 茶屋町口改札口より 北へ徒歩5分）
 〒530-0013 大阪市北区茶屋 19-19 TEL 06-6485-5611 http://www.kwansei.ac.jp/kg_hub/



アプローチタワー（ホテル阪急インターナショナル）1階フロア図



＜日本イギリス哲学会 第 50 回関西部会例会 報告要旨＞

報告 1 : ヒュームにおける歴史的知識

西内 亮平

デイヴィッド・ヒュームは哲学者としてのみならず、18 世紀の英国を代表する歴史家としてもその名が知られている。そのため、歴史をテーマにしてヒュームを論じる際には、何よりもまず彼の「歴史家」としての側面が注目されてきた。その一方で、ヒュームの「哲学者」としての側面はほとんど触れられないか、触れられるとしても方法論的な段階にとどまることが多かった。

こうした流れのなか、本報告では、『人間本性論』や『人間知性探求』といった彼の哲学的諸著作における記述を手がかりに、ヒュームの歴史論がもつ認識論的構造へと光を当てたい。ヒュームは、「カエサルは 3 月 15 日に元老院で殺された」に代表される歴史的知識を信念の一種として捉えているが、これは他の信念と異なるどのような特徴をもつのだろうか。また、空想上の物語とどのように区別されるのだろうか。『人間知性探求』でなされた証言に関する議論なども参照しつつ、これらの問いを検討していきたい。

(京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程)

報告 2 : ジョン・ロックのカトリック批判の再検討

—従順なカトリック教徒 (English Catholics) の存在を念頭に—

武井 敬亮

16 世紀の宗教改革以降、プロテスタント国家としての自立を目指すイングランドにおいて、カトリック教徒は、メアリ 1 世（「血まみれのメアリ」）の治世（1553—8 年）や火薬陰謀事件（1605 年）の記憶（イメージ）と共に、ローマ教皇やカトリック大国フランスといった対外的な脅威と結びつけられ、しばしば、社会秩序を攪乱する存在とみなされてきた。

ロックは、1659 年に友人のヘンリー・スタッブに宛てた手紙の中で、カトリック教徒に寛容を認めるスタッブの見解に疑問を呈す。ロックのカトリック批判は、『寛容論』（1667 年）や『寛容書簡』（1689 年）においても看取でき、一貫して不寛容の立場をとるものの、宗教礼拝や思弁の見解について条件付きで認めているところがある。本報告では、カトリック対プロテスタントの対立図式からではなく、宗教改革以来、国内に残存する体制に従順なカトリック教徒 (English Catholics) の存在を視野に入れながら、ロックのカトリック批判を再検討し、ロックの付した留保やニュアンスの実体に迫りたい。

(京都大学経済学研究科・経済資料センター・ジュニアリサーチャー)

(裏面につづく)

報告 3 : ドーバー海峡を渡ったトクヴィル

—19 世紀イギリスの定期雑誌における『アメリカのデモクラシー』論

川名 雄一郎

アレクシ・ド・トクヴィルの『アメリカのデモクラシー』（1835・1840 年）はフランスだけでなくイギリスにおいても注目を集めた。イギリス思想史の文脈においては、J・S・ミルによる批判的受容がよく知られているが、この事例に限らず、政治的立場を超えて多くの定期雑誌がこの著作を取り上げて論評していた。本報告では、19 世紀イギリスの定期雑誌における『アメリカのデモクラシー』書評論文を網羅的にとりあげて、同時代のイギリスにおいてトクヴィルがどのように受容されていたかを検討する。

イギリスの定期雑誌に発表された『アメリカのデモクラシー』に対する書評論文は必ずしも周到な理解を示していたものばかりでなかったが、この時期のイギリスにおいて同書が大きく取り上げられた理由としては以下のような事情が考えられる。第一に、しばしば指摘されてきたように、同書の議論の包括性がさまざまな政治的立場にとって都合よく解釈できる余地を残していたことである。このために、多くの雑誌がこの著作を取り上げ、自らの政治的主張を展開するために利用していた。このこととも関連するが、第二に、同書の主題であった「アメリカ」が 19 世紀初頭のイギリスの政治・社会論争において重要なトピックであったことである（この点については、報告者は『社会体の生理学』（2012 年）第 3 章において検討しており、本報告はその議論を踏まえたものとなる）。その意味で、『アメリカのデモクラシー』をめぐって当時なされていた言説を検討することは、当時のイギリスの政治・社会論争のコンテキストを描き出すことでもある。

(京都大学白眉センター)